

## 山陽放送RSKラジオに生出演して

日付：2012.24.6.28・29 AM6：55～8：00

番組名：「おかやま朝まるステーション」

担当：秋政孝一 取締役ラジオセンター長

アナウンサー：滝沢忠孝 部長・制作担当

6月7日の岡山歴史研究会の運営委員会を開催中に、山陽放送の秋政氏から出演依頼があり辞退の理由も無いので引き受ける方向で内諾した。6月15日に初の打合せをし、6月28日を迎えた。本業の仕事では放送局には何度も立ち入りしていたが、ラジオ局のスタジオに出演のために入るのは初めての経験であった。

秋政氏は吉備学会の仲間で、設立当初から山陽放送の原常務が出席されていたが社長に就任後は秋山取締役が参加されていた。特に食農部会では共通の仲間も多い。私がたまたま最近掲載した岡山歴史研究会のホームページの投稿文を見て、「岡山歴史研究会の副会長」の立場での出演要請であった。6月15日私が局に出向き滝沢アナウンサーと三人で打合せをした。「何時も出演者には訊くのですよ」として、「今週のお客様ってどんな方」と題したシートに答える形で進行し、それを素に滝沢氏が当日の構成を組み立てる。そのような雰囲気のようなものである。

初日は朝6時45分にスタジオ入りとの指示なので、30分頃を目安に局に向かう。早朝で少し早めに到着すると玄関に秋政氏が直接迎えて頂き応接室で待機しながら談笑。詳細なシナリオに沿って進行するのではなく、滝沢アナの柔和な人柄から滲み出るアドリブで一定の「時間割進行表」に沿って、アナが手元のスイッチを操作しながら、ガラス越しの別室に居るスタッフとの連携で、秒読みで進む。私は滝沢アナの呼び掛けに応答するだけで良い。

後で伺うとアナの他にスタッフは男女一人計三名の社員で毎日定刻に番組の大枠の中で細かな情報をニュースの形や話し掛けの形で進んでいる。局としての内容の細かいチェック等は無さそうだ。仕事は現場に一任され、山陽放送に相応しいレベルが維持されているのだ。局と社員の相互信頼で結ばれている。社員はこの仕事に生きがいを感じ、会社も必要以上の管理を要しない。それにしても公共放送は直接広く市民に流される。改めてマスコミの質の高さ、モラルの高さに感動する。

直接スタジオに入り身近に経験して、初めて進行中のアナとリスナー（listener=聴き手）が一体となり番組を共有していることを知る。テレビではそうは行かない面もある。ラジオでは聞き手側は自分一人に話しかけて来て居ると錯覚し、アナの呼びかけに直ぐ反応する。携帯メールやファックスが局に届くとその場で、アナが〇〇さんと声を掛け応じている。私はラジオやテレビは一方的に視聴者に流していると思っていたが、昨今のメディアは送る側と聴く側が一体となり番組を作りながら進行しているようだ。

卑弥呼の姿・形を私に求められ適当なイメージを表現出来なくて居ると、リスナーに呼びかける臨機応変な形で進行する。暫らくすると若い女優の名前が何通も飛び込んでくるが私には判らない。

岩下志麻さんぐらいがやっとなりで、私のイメージに近い。滝沢アナウンサーはそれなりに事前に歴史の通説を学習していて、手元にその書籍を開いて、私と共通する話題を誘い水に話しかけてくる。また私が心している歴史観をそれとなく引き出して「歴史を遊び心で楽しむ」「詳細で正確な年代よりも時代背景の重視」など私の言い出したいことを的確に紹介し程よいテンポで進んでいく。

二日目の冒頭で私を「歴史系の他に多くのポケットを持ったエッセイスト」との紹介に、私自身ビックリした。最近私は「ちょっと気になるテーマ」や「残しておきたい身近な話題」を随筆風にまとめ、私製の冊子にして、喜んでくださる方に送呈している。打合せの折に資料として届けていたものを読んで下さっていたことが判る。その中の「季節の野菜」からエコちゃん運動に話は進む。私を直ぐにその気にさせ話題は膨らむ。エッセイストと呼ばれて、恥じらいながらも内心嬉しかった。そんな私の内面も、たった一度の面談で汲み取り話題転換の切り口に誘い込む手法はさすがである、この道のプロと感心する。

エコちゃん運動の拡がりを紹介した頃には番組も予定の時間に近づき「山崎さんの好きな言葉は何ですか」と問いがあり、私はこれから望む生き方を「歴史を学び、身近な環境と共存するエコな生活をしたい」と締めくくった。

帰宅してパソコンを開くと、津山在住の赤枝女史から「歴史を学んでエコな生活」に共鳴とのメールを戴いていた。貴重な体験をさせて頂いた。感動の鎮まらない内に想いを残すことにした。関係者の皆様と、聴いていただき貴重なコメントを戴いた仲間の皆様に感謝のお礼の気持ちで一杯です。

2012.24.6.29

局の秋山センター長から戴いた写真の一部です。こんな雰囲気で行います。



スタジオ 全景



滝沢アナウンサーとの対話

『レポートありがとうございます。「感動の鎮まらないうちに」という一言にすべてが言い尽くされているようにおもしろい、この言葉に一寸 揺さぶられました。緊張されてたといえど、こんなに冷静に観察・記憶されていてすごかったです。』

「卑弥呼を女優に例えれば……」という質問のとき、ラジオのこちらでとっさに私の大好きな「岩下志麻」が思い浮かびました。そのうちにスタジオからもその名が出てきて、やっぱり！！と嬉しくなりました。

ほんとに スタジオとこちらの聞き手とが活発にやりとりしているわけですね。レポートを読んでいて、私が まるでその場にいるかのような臨場感に浸り山崎さんの感動を追体験した気がいたしました。貴重な体験をお知らせくださりましてありがとうございました。』

岡山歴史研究会の仲間 村山三枝子さんのコメントを戴きました。